

Title	ナギブ・マハフーズの小説における都市空間：現代エジプト作家の描くカイロ
Author(s)	福田, 義昭
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58740
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	福田義昭
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第8号
学位授与年月日	平成12年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ナギーブ・マハフーズの小説における都市空間 —現代エジプト作家の描くカイロ—
論文審査委員	主査 教授 高階 美行 副査 教授 宮本 正興 副査 教授 是永 駿 副査 教授 武藤 洋二 副査 教授 南田 みどり

論文の内容要旨

小説が人間の経験を様々な方法で表象するものであり、人間の経験が常に何らかの空間を必要とする以上、空間の問題は小説研究における基本的テーマの一つとして、現在にいたるまで様々な角度から考察されてきた。なかでも都市という空間は現代小説の研究において、最近ますます注目を浴びるようになってきたテーマである。このようなテーマが注目される背景には、都市が、近代以降、物理的にも概念的にもその領域を著しく拡大させながら人間活動の中心地となってきたことに対する我々の自覚がある。都市という概念は今日、我々の知的関心をそそのものとして認識されており、したがって小説というジャンルもまた、世界的な規模で都市化が進む中、否応なくそうした都市への詩学的反応を迫られてきた文学形式の一つとして我々の興味の対象となっている。本論文は、このような関心から、現代エジプトの作家ナギーブ・マハフーズ(Najib Mahfuz [1911-])の小説を「都市空間」という観点から総合的に分析・考察しようとするものである。

マハフーズの特異な点は、1930年代から90年代にまで至る長期間にわたって小説を書き続けてきたことであり、そのほとんど全てが徹頭徹尾の都市小説となっていることである。マハフーズは何よりもまず第一に、カイロという都市に所属する作家である。マハフーズを評して、しばしば二十世紀「エジプト」の歴史を描いてきた作家だというような言い方がされるが、これも結局は、彼が小説の舞台としてもっぱら首都カイロを選んできたことと無関係ではない。この場合、エジプトの歴史とは公的な歴史あるいは国家の歴史であり、そのような政治性を軸に見ると、首都は国家全体を換喩的に表すからである。さらに、歴史を通じてエジプトに備わってきた強力な中央集権的性格によって、この比喩的意味は一層強調されることになる。

マハフーズの小説世界には彼独特の精神地理学とも呼べるものが存在している。カイロという都市は執拗なまでに中心化される。よく言われるように「カイロは世界の母」であり、文字通り、世界の中心である。国外は言うに及ばず、エジプト国内でもカイロ以外の都市・農村は他のどの場所とも置き換えることの可能な、固有性を奪われた場所として表象される。唯一の例外はアレクサンドリアで、「歴史がつくられる場所」としての首都カイロに対して「歴史からの逃避場所、国内亡命地」として機能している。カイロは全世界というに等しく、その内部と近傍はかなりの程度シンボリックに分節されている。最も大きな対立は新市街と旧市街である。この対立は都市内部における異なる二つの時間・価値観を象徴している。都市の内部で空間移動は頻繁に行われるが、それは移動プロセスにおける経験というよりもむしろ、移動によって結ばれる場所同士が持つ象徴性を対比するために導入されている。ここでは、実在する地名が当然のように多用されている。そこは始めから歴史の集積した、意味に溢れた場所

あり、場合によっては、自由がほとんど存在しない場所となる。真の意味での自由の意識がほとんど見られないのは、マハフーズの小説の特徴である。カイロという都市は往々にして、抑圧的な空間となる。しかし、作中人物が息苦しい都市を避けて、田舎へ行くということはない。例えば、「文明としての都市」対「自然としての田舎」という図式はマハフーズにおいては存在していない。ナイルすら、しばしば自殺場所として登場することはあっても、自然として登場することは少ない。窒息しそうな空間の中で、開放的空間として登場し、過密都市の中の小さなオアシスとなっているのは、精々、建物の屋上くらいかも知れない。そこは頭上と四方が開け、また他人の視線から逃れられる場所である。

マハフーズの小説において、本当の意味で都市の対立項となっているのは、旧市街の東隣にある沙漠や荒野である。荒野 (Al-Khalāʾ) は原義通り「空っぽ」であって、歴史のない空間であり、歴史的な空間＝「都市・文明」と対比される。そういう意味では、周囲の地理的環境はカイロという都市に対して希有な条件を付与していると言える。カイロは世界でも指折りの巨大都市でありながら、ナイルと沙漠にはさまれた狭い土地に存在しているがゆえに、常に文明と荒野という都市にとっての原初的な対立をその住民に意識させずにはおかないのである。そして、この虚無的な沙漠や荒野と人間世界の間にはカラーファ（墓地）が広がっていて、歴史と無の境界として象徴的な意味を担っている。

マハフーズの精神地理について、一つの仮説を提示してみたい。それは「タキーヤ」（神秘主義者の修道場）と「細い通路」、そして「大シャイフ」に関するものである。『我らがハーラの物語』において、生きた信仰対象の象徴である幻の「大シャイフ」が現れるのは「タキーヤ」である。その「タキーヤ」と城壁に囲まれた「細い通路」はトンネルとつながって、人間世界と荒野をつなぐ通路としての象徴性を持っている。『ハラーフィーシュ叙事詩』の舞台となるハーラについても同じことが言える。重要なのは、すでに『三部作』の中にこのようなトポグラフィーの源泉が見出せることである。「シャッター家」が「タキーヤ」に、家の横にある「脇の通路」が「細い通路に」、そして「アイダ」が「大シャイフ」に相当する。『三部作』における恋愛のトポスは、変形加工されながら、『我らがハーラの物語』という半現実的・半架空的な都市を経て、最終的に『ハラーフィーシュ叙事詩』の架空都市の中へ、神聖なるトポスとして持ち込まれたと考えられるのである。

西洋化とセットになった近代化はアラブ小説の大きなテーマの一つだった。アラブ圏の多くの作家が、多かれ少なかれ自己をモデルにした留学生などを登場させ、二つの文明の狭間に立った先覚的な知識人＝アウトサイダーを一種の教養小説の主人公として、西と東という大きな対立的トポスの中で描いている。しかし、マハフーズにとって西洋文明はもはやエジプトの一部であり、自らの一部であった。西洋文明の移入や近代との出会いは、先駆的知識人による地中海を挟んだ広大な空間の往復を通してではなく、「東洋にいながらにして西洋を見いだした者」の経験としてエジプトやカイロという空間内においてシンボル化された装置——西の新市街、東の旧市街——によって、また一つの社会の通時的な変化を通して描かれる。

初期の作品では、西洋的衣装（＝西洋的生活様式）という記号によって定義される都市のアファンディー層が、近代化を巡る様々な社会的問題を扱う上での焦点となっている。アファンディーに関連して言えば、マハフーズの小説世界における人物類型のうちでも最も重要なのが官僚ということになる。『ハーン・アル＝ハリリー』と『ミダック小路』は、カイロという都市が近現代において内包するに至った二つの中心的トポスの対立——新市街と旧市街の対立を背景に、人間の生活を鳥瞰的に描いている。擬人法や換喩の多用によって描かれるミダック小路は、小説の真の主人公となる。『三部作』におけるアミーナにとって、マシュラビーヤ（出窓）は外部世界に開かれた唯一の裂け目であり、外部の公共空間を見ることのできる貴重な劇場であった。このマシュラビーヤ一つで、『三部作』は二十世紀前半における家族空間の変容を描いている。家長アハマド氏の衰退は自分の空間を次々と失っていく過程として描かれている。そのクライマックスは、かつて家の中でも最も明確だった空間図式、すなわち夫と妻の空間図式が見事に反転してしまうシーンにある。『鏡』に描かれているのはカイロという都市の

内部に縦横に張り巡らされた知人のネットワークである。一方『朝夕の話』では、大家族のネットワークがカイロ中に広がっている。これらの小説を読んだ後に脳裏に浮かんでくるイメージは、一つの巨大な村、あるいは大家族としてのカイロである。

若干の例を除いて、本当の意味での風景描写があまり見られないマハフーズの小説作品において、相対的に風景描写が充実し、それが重要な意味を担っているのは『クシュトゥムル』や『我らがハーラの物語』など回顧的な一人称語りを採用した作品である。記憶はいつも風景と結び付く。『クシュトゥムル』は、数多くの風景描写を取り入れることによって、アッバースィーヤという一つの場所の変化を描いている。それに対置されているのは、変わることもない人間の絆であり、時間への抵抗である。その中心にあるのが、クシュトゥムルという茶店である。マハフーズの小説では、多くの場合、茶店は時間による変化に堪え抜く存在である。何故なら彼にとって茶店とは、単に茶を飲む場所である以上に、人間的連帯の象徴だからである。

60年代の小説は全て、52年革命後の社会において、時代に置き去りにされ、社会から疎外された人物＝アウトサイダーを扱っている。特徴的なのは、非社会化された空間として、これらの小説には夜が頻出することである。暗い空間は社会のものではなく、個人のものであり、それはアウトサイダーを守ると同時に、彼の孤独をいっそう押し進める。また、マハフーズは60年代の小説以降、内的独白や意識の流れといった手法を一貫して使用するようになったが、これは一言で言えば、人間によって生きられる内的時間を導入したということである。そうすることによって対置されるのは、革命という「歴史」＝「体制の時間・公的時間」と「個人の時間」であり、この時間的対立が空間の構成にも反映している。暗く、閉じられた密室的な空間はこれらの作品の中で作中人物たちが生きるトボスの特性となっている。

『ハラフィーシュ叙事詩』や『我らがハーラの子供たち』における都市は架空の都市というだけではまだ不十分であって、その架空の都市を構築するのに、マハフーズがまだカイロという現実の都市に強く執着しているということをつけ加えねばならない。そうすることによって創り出された架空の都市は、歴史を越えた地点に浮かび上がる抽象的な精神としてのカイロであり、それはまた現実到我々がカイロと呼んでいる一つの特異な「都市的文化システム」(エドワード・サイード)でもある——それも極めてイスラミックな。

小説は都市を生む。マハフーズは小説の中に繰り返し、少年時代に見た原風景を登場させたり、さらにその原風景を取り入れながら神話的物語を書いているが、それは、自らの生の記憶をカイロという都市のシンボリックな歴史的空間の中に組み込むことでもあった。そのようにして、マハフーズは都市の一部となったのである。

論文審査の結果の要旨

福田氏による標記博士論文審査委員会は、所定の手続きにより審査を行い、その内容を以下の要旨として報告する。これは、各審査委員による審査報告を主査がとりまとめ、委員の確認を経たものである。

標記論文は、「現代エジプト作家ナギーブ・マハフーズの小説を『都市空間』という観点から総合的に分析・考察」(執筆者)することをめざしたものである。先行研究に対する綿密な批判的検討と関連する文学研究の成果を吸収して提示される方法は、作品論の集積としてではなく小説群を総体として考察し、ノーベル賞作家マハフーズの小説における都市空間を作家の精神地理学としてとらえる方法である。

すなわち、政治的、宗教的枠組みに制約を受け「作家の直線的進化」を強調する従来の研究に対して、執筆者は、小説における都市の「成立」の解明を都市空間を構成するシンボル体系の分析に求める。都市を形成する建築物や街路の作品における意味作用を、茶店、小路、邸宅、街区などのトボスの描写に探り、新旧市街の対比や都市と砂漠の対立などもテキストにそって浮き彫りにする。こうした論証プロセスでは、小説の記号学や修辞学に関する該博な知識が窺われる。都市空間が生活と人生の場としてとらえられ、執筆者がマハフーズの精

神地理学と呼ぶものの内実が説得力をもってみごとに解明されている。

しかし、「小説群を総体として」考察するという論述の姿勢はマハフーズ研究の空白に切り込んだ労作と評価できるが、作品世界の空間をできるだけ広く論述対象にしようとしたためか、時に、興味深い指摘が十分展開されない場合もあるのは惜しまれる。あるトボス（「茶店」等）が作品ごとのプロットの展開の中で異なる意味を付与しうる可能性、マハフーズという作家におけるカイロの描写と「エジプト文学」の関係の理解などは、きわめて優れた言語能力と文学研究資質を備えた執筆者に対し、今後の詳論を期待するところである。

総じて、本論文において執筆者は、優れた作品読解力、論理構成、文章表現力により、都市カイロを舞台とする小説言語がその都市像を生成し、読者はその都市像を現実のカイロとして認知する（「小説は都市を生む」）というエピグラムの証明に成功し、マハフーズ研究をとおして内外の現代アラブ文学の研究に大きな貢献を行ったと評価される。